

# 「大坂の史跡を訪ねて」連載37回目

オサタニ ヨシハル  
長谷 吉治

## 【大阪南部ゆかりの史跡】

今回からは大阪市内を外れて大阪府内の史跡をご紹介します。

勝 海舟ゆかりの地

### 1 境橋 仇討ち場跡

阪南市山中溪

- ▶ 文久3年(1863)6月2日、土佐藩士 広井磐之助が父(広井大六)の仇となる元同藩士 棚橋三郎を討ち果たした場所です。
- 安政2年(1855)12月、広井大六は高知城下において、泥酔し抜刀して向かってきた棚橋三郎に斬りつけられ、溺死させられてしまいました。
- 加害者の棚橋三郎は土籍剥奪のうえ国外追放、被害者側の広井家は跡目断絶となります。広井磐之助は17歳で、仇討ちのため棚橋三郎を9年間探索しますが、その間は見つけることができませんでした。
- 文久3年(1863)の春、勝 海舟の寓居先である大坂の専稱寺に勝の門下生である坂本龍馬を訪ねます。事情を説明して探索の協力を依頼し、勝 海舟も協力することとなります。
- 同年5月25日、紀州加太ノ浦の台場工事でそれらしき人物が居るという情報を入手します。広井磐之助は加太へ駆けつけますが、その頃棚橋三郎は紀州藩に捕縛されていました。紀州藩から「6月1日、棚橋三郎を紀州と泉州の境の山中村にて追放する」と連絡が入ります。勝 海舟の門下生 佐藤与之助、千屋寅之助(のちの菅野覚兵衛)、新宮馬之助が助太刀として加勢しました。
- 6月2日、追放される場所に棚橋三郎を待ち伏せし、遂に仇討ちを果たしました。
- 仇討ちの場所が天領であったため、広井磐之助は堺町奉行所に身柄を拘束されますが、広井磐之助は、すぐに土佐藩住吉陣屋に引き渡され、2ヵ月後には土佐に戻ります。
- 長年の流浪生活が影響してか、3年後の慶応2年(1866)に病死します。

「海舟日記」によると次のような記載があります。

文久三年六月三日

『大坂へ帰る。広井磐之助復讐、一昨日、和泉山中村にて本意を遂げたる趣、佐藤、千屋より聞く。且、此事によって、紀州家の事を執りし者へ粗品を送り、その労を謝す。広井生は、堺奉行へ訴え出でたり。同所奉行へ糾済みの上、引渡しくれべき旨、頼み遣わす。(以下省略)』



境橋の仇討ちの碑

## <日本最後の仇討ちについて>

「日本最後の仇討ち場」とあり、仇討ちの許可をとった上で果し合いを行った最後の場という意味ですが、文久3年以降に次のような「仇討ち事件」が起こっています。

## <赤穂勤王党による文久事件と高野の仇討ち事件>

幕末の赤穂藩は、佐幕派と勤王派に分裂し、藩政の勢力争いをしていましたが、佐幕派が実権を握り、勤王派を政治の場から引きずり下ろしました。

これに反感を持った勤王の過激派 西川升吉は「赤穂勤王党」を組織し、佐幕派のリーダーである家老 森 主税、その用人 村上真輔 2人の暗殺を謀ります。

文久2年(1862)12月9日夜、13人の刺客が2人の命を奪うことに成功します。

13人の刺客は藩外へ逃れ、大坂の土佐藩蔵屋敷において保護を受けました。

文久3年(1863)8月18日の政変、続いて蛤御門の変により、赤穂藩では勤王派の勢力が衰えていきます。そして明治維新を迎え、藩庁は、文久事件に関わった両派を仲直りさせようと努めます。

文久事件で暗殺された村上真輔の子孫中心に、かつての刺客たちに対する復讐計画が企てられました。これを察知した藩庁は、生き残っていた刺客6名を高野山にある藩主森家の墓守を命じます。復讐を誓う村上家の子孫7名は、一足早く高野山に行き、6人の到着を待ち伏せして、明治4年(1871)2月30日、仇討ちを成功させます。これを「高野の仇討ち」といいます。

赤穂藩は、「四十七士の討ち入り」だけでなく「高野の仇討ち」と、2回もの仇討ち事件を起こしていることとなります。さて、仇討ちの現場に近い道路脇に「殉難七士の墓」が建てられ、討ち取られた6名(かつての刺客)は、ここで静かに眠っています。なお、6名なのに何故七士なのかといいますが、6名のうちの一人の弟が、文久事件とは全く無関係でありながら勇敢に闘ったため、復讐組が誤って斬ってしまったからだそうです。討ち取った7名は、丁重な待遇を受けていましたが、司法卿江藤新平は、死刑に値すると判断します。最終的には、大阪裁判所は、死罪は免じ禁固刑の判決を下しました。同日、太政官より「仇討ち禁止令」が出されます。(明治6年2月7日)

日本最後の仇討ちは、明治13年、旧秋月藩士 臼井六郎が幕末期に父母を殺害した同藩の一瀬直久を討った事件とされています。臼井は自首後、終身刑を受けます。

2

## 勝 海舟宿泊の地 庄官戸口仙蔵邸跡(戸口家)

泉南郡岬町多奈川谷川

- ▶ 文久3年(1863)4月1日、勝 海舟は大坂から紀州へ向かう途中、ここ多奈川に立ち寄り1泊しています。

宿泊先は多奈川の庄官 戸口仙蔵邸で、現在も子孫の方がその地に住んでいらっしゃいます。当時の戸口家は、門前まで海に入り組んだ小湊になっており、小舟で屋敷に入れたようです。現在の建物は、大正期に建て替えられたものだとそうで当時の面影はありませんが、庭にある井戸は当時から残っているものだとそうです。

庭は当時、お白州の場だったと言いつづられています。

海舟日記にも記載されていますが、戸口仙蔵は、この地域(土浦藩領)で庄官を務めていました。文久3年(1863)、近くの淡輪(たんのわ)陣屋で「大砲御筒凌」という砲術の訓練があり、谷川村から戸口仙蔵の弟が参加したという記録があります。

勝海舟が宿泊した際、戸口仙蔵は海舟の目にとまり、「江戸に来ないか(あるいは一緒に来ないか)」と誘われたと戸口家では言いつづられているようです。

戸口仙蔵は断りますが、子の亀太郎【その後通(とおる)に改名】は同行したかったそうです。

勝 海舟日記に次のような記載があります。

文久三年四月朔日

泉州田川へ泊す。此地は僻地、土屋采女正領所にて小湊あり。庄官 戸口仙蔵方へ泊す。途中より雨。  
※田川(多奈川)は土屋采女正(土浦藩土屋家)の飛び地領でした。

2000年に続いて2007年9月に戸口家を訪問し、当主の方とお話することができました。

明治に入り戸口仙蔵の子 亀太郎は、政治家になりましたが私財を投げ打ってしまいます。

亀太郎の子は大阪に出て仕事で成功を収めます。

父の隠居場所として建てた家が現在残っている家です。

また、日本地図を描いた伊能忠敬も戸口家を訪れたことがあるそうです。



庭に残る古井戸



戸口仙蔵邸跡(戸口家)

### 3 土浦藩(土屋相模守)此池築の碑

泉南郡岬町深日(棟合ノ谷)

▶ 江戸期、泉南郡岬町は明治維新まで土浦藩土屋家の飛地領でした。その名残でいくつかの史跡がありますが、岬町棟合ノ谷にある溜池「古池」「新池」は、土浦藩土屋家によって人工的に作られた池です。場所は、国道26号線を大阪から和歌山方面に走ります。南海電鉄多奈川線深日町駅下のガードをくぐって峠を登っていきます。左手に南海電鉄本線が見えてきますが、1番目の小さな踏切がある細い路地を入り、山道(林道)を登っていきます。かなり登ったところに2つのため池「古池」「新池」があります。新旧同じ内容の記念碑が2つありますが、古い方は、宝永7年(1710)に建てられた碑です。表面には「土屋相模守此池築」と記され、両脇に「奉行 木村 茂兵衛」「奉行 山中 源太夫」と明記されています。

この池は、約50日という日数と述べ人員6101名の労働力を費やして築られました。山道ですので車で行くにはかなり無理がありますが、池で魚釣りをする人は車を利用しているようです。



宝永7年に建てられた碑



宝永7年に建てられたものと同じ内容の新しい碑



新旧並んで建っている碑



土浦藩によって作られた池

### 土浦藩について

土浦藩の藩領は、現在の茨城県土浦市で石高は9万9千石でした。  
 藩祖は、下総 布川5千石から土浦藩3万5千石として入封した松平信一(のぶかず)です。  
 その後、藩主となる大名家が松平氏→西尾氏→土屋氏→松平氏と入れ替わりましたが、貞享4年(1687)、土屋政直が藩主となってからは、明治維新まで土屋家が藩主でした。  
 第17代藩主となる土屋彦直(よしなお)は、水戸徳川家から土屋家に養子として入った人で、幕末期ではこのことが藩の政局に影響を及ぼしました。  
 領地は常陸(茨城県土浦市)だけでなく、和泉(大阪府)の一部や下総相馬郡など飛地領がありました。

### 土浦藩飛び地領について

泉南郡岬町は寛永7年(1630)以降幕府領となっており、勘定奉行配下の代官が支配していたようです。  
 寛文2年(1662)以降は、大坂城代を務めた者の知行地として支配することになりました。  
 貞享2年(1685)土浦藩の土屋政直が京都所司代、老中と昇進していき、この地は土浦藩土屋家の飛地領として明治維新まで継続して支配されました。

4

## 吉田松陰宿泊の地 山田文英邸跡(山田家)

泉南市岡田

- ▶ 嘉永6年(1853)1月26日、吉田松陰は長州萩を出発。萩から江戸に至るまでの旅を日記「発丑遊歴日録」として書き残しました。  
 海路で大坂に着いたのは同年2月10日でした。  
 約3ヶ月間、大坂・五條・富田林・岸和田・泉州各所の儒者を訪ねまわりました。  
 同年2月26日泉州岡田浦から山田文英が、岸和田滞在中の松陰を訪ね会談しました。  
 3月3日に岸和田を発った松陰は、3月5日、泉州岡田浦の山田文英の邸を訪ねました。  
 5日から17日の13日間、山田家に滞在しました。



岡田浦の山田文英邸跡(山田家)

現在は、当時の面影もありませんが、子孫の方が山田文英邸跡地に居住されています。  
 松陰は「発丑遊歴日録」に山田文英のことを次のように記載しています。

二月二十六(前文省略)

山田文英なる者は雲(州)※現在の島根県の人なり。泉(州)の岡田に來り醫(医)業とす、亦來りて一宿す。

三月五日 熊取を發し、岡田の山田文英の家に至る。行程二里。岡田は一漁村なり。文英の門生に西川俊齋と云うものあり、紀の人なり。